

私は長い間日本とアメリカだけが世界だと思っていたような気がする。敗戦が終戦という婉曲な言葉で表現され、民主化が強調されていた。日本の歴史は書き替えられ、満州国設立以来の侵略の歴史は、進出ということばで語られていた。大東亜戦争は太平洋戦争という言葉に置き換えられた。戦争が中国との間の戦争ではじめられたことも忘れかけていた。冷戦のなかで中国は中共と呼ばれていて、国交が回復したのは1972年（昭和47）年のことである。

韓国との日韓基本条約が締結されたのも1965年（昭和40年）のことであった。韓国に初めて行ったのは1990年のことであった。隣の国韓国は遠い国であった。

当時日本ではチョー・ヨンピル（趙容弼）の「釜山港へ帰れ」が流行していたが、韓国では日本の映画やテレビ番組、大衆文化は輸入禁止であった。韓国へ興味を持つようになったのは金東祚の『韓日の和解―日韓交渉14年の記録』を読んでからである。韓国KBSの元会長に会ったが、彼は日本の大衆文化は低俗であり、日本の娯楽産業が韓国に上陸したら韓国の産業は日本に席卷されてしまうと真面目に考えていた。

韓国は第二次世界大戦では戦勝国ではなく、日本の植民地として日本とともに戦った敗戦国である。韓国人のなかには東南アジアでB級戦犯として処刑された人もいる。傷痍軍人となって、戦後国籍が韓国人になってしまったため、日本国から保障をいられなくなった人も大勢いる。韓国では、戦後独立国となり8月15日は光復節、光がよみがえった日として祝っている。しかし、その様子は日本のテレビや新聞で紹介されることはない。

中国へはじめて行ったのは1988年のことである。日中国交回復は1972年のことであり、戦後40年もたってからということになる。NHKが中国中央電視台と共同制作で作った1980年に放送した『シルクロード』などで親しまれていた。当時北京空港から市内に向かう道は柳の並木に囲まれ馬車が行き来し、道路沿いではスイカを並べて売る人を数多く見かけた。市内に入ると自転車の洪水であった。北京市内でもタクシーを捨てるのは北京飯店の前だけであった。中国中央電視台の人たちは人民服のようなものを着ていたが、礼儀正しく、歓迎会などを開いて親切にしてくれた。

街にはまだ紅衛兵の「造反有理」などの落書きが残っていた。中国人は使う人民元と外国人が使う兌換元とがあって、日本人は兌換元だけしか使えなかった。買物は友誼商店というところであるのだが、筆、硯、印鑑、印肉、陶器ばかりが並んでいた。どこへ行っても食べ物は美味で、レストランでは中国人に人民元で払ってもらって、店をでてから兌換元を渡した。渉外担当の通訳は人民元と兌換元の差額をマージンとして得られるので喜んでくれた。

人民はまだ貧しかった。私が少年時代を過ごした戦中・戦後もみんな貧しかった。だから、貧しい中国にはシンパシーがもてた。人々は物質的豊かさを求めている。しかし、豊になればそれで満足するものでもないのが人間である。人々は自由と民主主義も求める。不平等が

生ずれば、人民の不満はおさまらない。中国の改革開放への道は文化大革命から天安門事件へと進み、決してなだらかな道ではなかった。

その後、私がほとんど毎年中国へ行っていた。1990年代には地方の空港へ行くと地図に UK.OCCUPIED と書かれていた。イギリスによる植民地支配は1997年に終了した。香港返還による植民地支配の終了は歴史的慶事であった。しかし、香港市民は植民地支配からの独立とともに自由を求めている。香港にとって中国本土の市場は経済的には欠かせない市場だ。しかし、香港市民は自由も繁栄も求めている。経済的繁栄を自由と引きかえにすることはもはやできない。

最初に北京にある中国中央電視台(CCTV)を訪れたのは夏の時期で、今日は七夕だな、七夕の行事は万葉集の時代に中国から伝わったものだから、中国ではどのように祝うのかな、と思っていたが、どうも七夕を祝う様子はない。中国語の新聞は読めないのでホテルで英字新聞を買ってみると、今日は Marco Polo Bridge の記念日だという。Marco Polo Bridge とは盧溝橋の英語名で、『東方見聞録』を書いたマルコポーロが13世紀に北京を訪れたとき最初に通ったのがこの橋だとされている。盧溝橋事件は中国では「七七(チーチー)事変」と呼ばれ抗日記念日であった。七夕飾りは見られなかった。盧溝橋の近くには小泉首相も行った抗日記念館などがあり、日本人の生体解剖の人形などが展示されていた。

定年後女房と北京を訪れたときは秋だった。中国では月餅は中秋の名月のころにだけ食べる。ホテルのロビーで月餅を売り出していたので月餅を買って食べようかと話していると、今日はチュー・イッパーだという。9.18である。何の記念日か思いあたらない。どうも9月18日は柳条湖の日、満州事変勃発の日であるらしい。このようにして中国の暦は7月7日(チーチー)の盧溝橋事件から9月18日(チューイッパー)の満州事変、そして10月1日(シーイー)の国慶節(建国記念日)へと進んで行くのである。歴史認識の違いの深さを感じざるをえない。

北京では明の十三陵や万里の長城も見に行った。中国の古代遺跡もローマの遺跡に劣らず私を圧倒した。中国の皇帝が持っていた絶対的な権力を見せつけられたような気がした。万里の長城に比べると、共和国アメリカの大統領がメキシコとの国境に作ろうとしている壁などは小さなものだ。西安の兵馬俑や敦煌の莫高窟を訪れてからはアジアの遺跡に魅せられていった。

日本と中国、韓国、アジアとは古代史ではつながっているが、近代史では歴史観を共有するには至っていない。残念である。最初に韓国を訪れたときは、ソウルの旧総督府の建物は博物館として使われていたが、その後訪ねたときは目障りだとして総督府の立派な建物は取り壊されてしまっていた。日韓両政府は和解にこぎつけるまで14年の歳月を要したが、国民の心はいまだに和解には至っていない。戦争は片方だけが正義で、負けた方は悪だということではできないのかもしれない。しかし、未来志向とはいえ、歴史は消し去ることはできない。

東西文化の交差点イスタンブールには塩野七生の『海の都の物語』に導かれて行った。アラブ圏にいったのはこれがはじめてだった。イスタンブールは古くはコンスタンチノーブルとも呼ばれ、ギリシャ・ローマ文明の終着点でもあり、オリエント・エクスプレスの終点でもある。ブルーモスクやアヤソフィアは今までに見たこともない文明との遭遇であった。現在は博物館になっているトプカプ宮殿では古伊万里焼の陶器が多く展示されていた。陶器にはオランダ東インド会社の印が焼きつけられていた。イスタンブールはベネチアと船で結ばれていたばかりでなく、遠く長崎ともつながる東西文化の接点であったのである。

EBU（ヨーロッパ放送連合）の総会がキプロスであって、それに出席したこともあった。キプロス島はエーゲ海の島で、北半分がトルコ領で、南半分がギリシャで、まさにヨーロッパとアジアに分断されていた。古代ギリシャ文明の遺跡が残っているすばらしい島だったが、戦争による分断はここにもあった。

ヨーロッパのなかにもアラブの遺跡はいくつかあった。地中海沿岸はアラブの軍隊に席卷されていた期間があり、イタリアやスペインなどの教会は回教寺院を改築したものもかなり見られる。

バルセロナにはフランスに出張したときに行った。フランス人は週末には働かないから、私は金曜日にパリを出て月曜日の午前中にパリに帰るという計画をたてた。サグラダ・ファミリアを見たかったのだが、ピカソやミロの美術館もあって、パリにもおとらない芸術都市だった。カタルーニアには自由の精神があると思った。さもなければ、ガウディーやピカソ、ミロ、ダリなどの芸術が生まれるはずがない。マドリッドの重厚なゴヤの世界とは全く違う。

バルセロナではまだ闘牛も行われていた。闘牛場の入場料金は日のあたる側(Sol)と日陰になる側(Sombra)に分かれていて日陰の方が高い。日のあたる側は逆光になって見にくいからであった。観客席の下は屠殺場になっていて、傷ついた牛はそこで殺処分されていた。合理的といえば合理的だが、むごい気もした。今のことばでいえば動物愛護精神に欠けているように思えた。それでも人間は古代ローマ時代以来、闘技を好む本性を持っているようだ。

インドのアジャンタ石窟には大村次郎の写真に惹かれてヨーロッパからの帰り道一人で訪ねた。カンボジアのアンコールワット寺院にはタイ在住の友人に誘われて行った。ちょっと寄ってみるつもりだったが、最低でも二泊はしないと見られませんよと言われたが、確かに壮大なアジア遺跡であった。ヒンドウ教の寺院だが、石の彫刻が豊かで、神を崇める心が作り出す美の世界の奥深さ、優しさに感銘をうけた。インドネシアのボドブドゥール、韓国の慶州、台湾、タイ、フィリピン、ラオスなども訪れた。

しかし、ヨーロッパの古代文明にふれ、アジアを再発見した私には、青春時代のようにア

アメリカは輝いて見えなくなってしまうていた。アメリカはいまだに未開の荒野に向かって歩み続ける勇気と蛮性を残した国なのではなかろうか。それが活力となっている国のようでもある。しかし、心の安らぎはアジアにある。

NHK を早めの55歳で退職してからは(財)NHK インターナショナルでNHKの番組を海外に提供する仕事をした。「おしん」などの英語版やスペイン語版を作って海外の放送局に提供するのである。英語版は日本でも作ったが、カナダのバンクーバーでも作った。バンクーバーには映画やテレビのスタジオがたくさんあって、ハリウッドより安く作れるのでアメリカの放送局もバンクーバーで番組を作っていた。番組の提供先はほとんどが発展途上国である。

スペイン語版はメキシコで作った。中南米を中心にスペイン語圏の放送局の需要もおおかった。キューバに行く機会は残念ながらなかったが、隣のジャマイカに行ったこともあった。ジャマイカはレゲエの島である。島の南半分は貧しい黒人街で北半分はカリブ海の楽園である。北のリゾート地は日本からの新婚さんでにぎわっていた。コーヒーのブルーマウンテンを産することでも有名で、島の真ん中を貫く山ではコーヒーが栽培されていた。山と言っても標高の低い山であるが、急斜面だから機械が入らず手入れは大変のようであった。コーヒーの木とバナナを交互に植えて、バナナは食べるのではなく、コーヒーの木の日よけに使うのである。山頂の小屋でカリブ海を眺めながら飲んだコーヒーは格別の味であった。

アメリカ西部やハワイには日系局があって、ここへも番組を供給した。これは日本語でよかったが、まだ放送衛星の運用が本格的にはじまっていなかったから、日本でビデオテープに収録して成田から航空便で送っていた。留学するとき泳いだワイキキの海岸は日本人客で一杯であった。空は青く、海には熱帯魚が泳いでいたが、サンゴ礁は白化現象がかなり進んでいるようだった。ハワイアン・オープン(現在はソニー・オープン)が行われ、青木功がチップイン・イーグルをとって逆転優勝したことのある名門ゴルフコース・ワイアラエがダイヤモンド・ヘッドの麓にあって、日系局の社長さんと回ったのも、潮騒の音とともに思い出深い。

インドネシアのバリ島ではアジアの放送局の番組コンクールが開かれ、審査委員として何回か訪れた。熱帯の島だが風がさわやかだった。観光の島であり、ホテルのロビーではガムラン音楽が奏でられていた。夜は田んぼの中の会場にケチャを見にいった。影絵芝居(ワヤン)は夜通し行われるというので、つきあいかねた。ボドブドウールの遺跡も訪ねた。火山岩の黒い石で作られた仏像は、砂岩でつくられたアンコール・ワットの優美な姿に比べると、やや期待はずれであった。コンクールではインドネシアの女優さんと食事をしたこともあった。美人の女優さんはバナナの葉の上にのせたご飯を手でまるめて器用に食べた。あまりロマンチックではなかった。

私はインドのアジャンタ洞窟、中国の敦煌遺跡、カンボジアのアンコール・ワット、ボドブドゥールなどを訪れて、心もアジアに回帰していった。私が行ってみたいアジアの国で最後に残ったのがミャンマーであった。大正大学の客員教授をしていた時、その機会は訪れた。浄土宗系の寺の僧侶がミャンマーを訪れるという噂を聞いた。私は僧侶ではなかったが袈裟だけをもらい、その団体に入れてもらい、ミャンマーのバガンを訪れることができた。ミャンマー訪問団の目的は太平洋戦中にビルマ戦線で亡くなった日本軍兵士の慰霊と、最貧国ミャンマーに学校を寄付することにあった。ミャンマーでは日本円で200万円あれば小さな学校一つが建てられるという。学校には別棟でトイレが二つあった。私は当然それは、男女のトイレだと思ったら、一つは教師用でもう一つは生徒用だという。

ガバンは塔（ストーバ）の街であった。金色に輝く塔がいたるところにあった。仏も金箔が貼られていた。奈良の仏像も奈良時代には金色に輝いていたのであろうが、今みるとミャンマーの仏像には、奈良の仏像とはちがう仏が宿っているように見えた。国連の統計によるとラオスの一人当たりのGDPとミャンマーのそれとはほぼ同じであるが、イギリスの植民地であったミャンマーの方が、フランスの植民地であったラオスに比べて、はるかに社会資本が充実していると感じた。

私は世界のなかの貧しい国々を訪れるにつれて、それらの国々の魅力に引きこまれていった。それは少年時代の貧しかった日本に対する郷愁からだけではなかったと思う。常に前を向いて走り続け、毎日株価の動向に一喜一憂し、走り続けた間に日本が失ったもの、戦後アメリカン・ウェイ・オブ・ライフを手に入れるために日本が失ったものをアジアの最貧国の中に見たからだと思う。現在の日本は1960年代のアメリカになってしまったともいえる。

植民地支配の時代は終わった。グローバル化によって貧しい国がますます貧しくなっていることも事実である。石油資源のある国は別として、資源のない国の国際収支は常に赤字である。コーヒー・香料などのモノカルチャーは価格の変動が大きい。木綿は化学製品に押され気味である。ゴムは石油製品にとって代わられてしまった。阿片は身を亡ぼす。

幕末に日本が開国したとき、実は日本には外国人のほしがるものが数多くあった。生糸、絹織物、お茶、奥州の金、九州の石炭、伊万里などの陶器、漆器、沖縄の砂糖などを輸出して、蒸気船などを買入れることができた。しかし、現代の途上国は国際援助によらないで自立できる国は少ない。明治時代に東と西に分かれていた地球は、今や南と北に分かれているように見える。

【予告編】

第10話 アメリカ NOW